

copy

ワイルド研究資料目録

文学博士 本間久雄 編

目次
オ1部
オ2部
オ3部
オ4部

日本ワイルド協会発行

1976年5月

本間久雄

それは昭和3年秋のことであった。折柄滞英中の私は、凶らずもロンドンの書店 Dulau & Co. の楼上で、ワイルドの原稿、書簡、初版本その他、ワイルド研究に関する多くの文献が売りに出ていることを知った。これらの文献はワイルドの親友で且つその遺稿管理人であった Robert Ross, ワイルド研究の第一人者 Stuart Mason (C. S. Millard) 及びワイルドの第2子 Vyvyan Holland の所蔵品から選集したものであり、その数のおびただしいものであったことは、上記の書店 Dulau の「目録」によってもうかがうことが出来た。

私はそれらの文献の中から、差当り(当時の私として)研究上不可欠と思われるものだけを数十種買い求めた。往年の拙著「英国近世唯美主義の研究」(昭和9年刊)は、それらの文献に依ること、極めて大きかったものであった。

此度新設の「日本ワイルド協会」のすすめに従い、これらの文献の中の一部と、これに私がロンドン街上の散策探訪で得た数種の稀観物や、更に上記 Holland 氏の厚意の賜物である「ワイルドの髪の毛」や、Arthur Symons の詩稿、自署入りの写真や、Max Beerbohm の署名入りの著書や、Galliene, R. L. の私宛書簡並に詩稿、Gordon Craig の私宛の書簡並に自筆談話などを加えて、併せて展示することにした。幸いに大方識者の清鑑を得て、かつては一代に宣伝された英国世紀末の鬼才 Oscar Wilde の人と芸術とを偲ぶよすがともなれば、私の悦びこれに過ぐるはないのである。

ただし、展示品の解説は、遺憾ながら粗の粗に流れている。いづれは機を得てワイルド書誌を編みたいと思っているので、委しいことは、そこに譲る。なお私は、展示したもの以外のワイルドの研究書で、私の手元にあるだけを、別の目録にかかげておく。新しくワイルド研究を志す人のためへの、いささかの婆心からです。

(昭和51年5月22日)

第一部 新聞(雑誌)切抜帖

展示品はこれを三つの部類に分ける。第一は、1870年代から1922年に至る長い間のそれである。なおそこに貼附された蔵書票(Book Plate)によると、最初の1870年代から80年代初期のものは、"The Aesthetic Movement in England" の著書 Walter Hamilton の編纂にかかり、他は Stuart Mason のそれであることがわかる。私はこの「切抜帖」を、そこに盛られた内容に従って、以下の順序に整理してみた。

- (1) 第一集 大型四ッ折版。1881年から1888年までの文壇、劇壇の記事、長短合わせて80余篇が収められている。所収の新聞雑誌は、"Punch, or the London Charivari", "Opera Comique", "Actor's Art", "Magazine of Art", "Art and Letters",

"Daily News", "Evening News", "St. James Gazette" 其他である。特に注目すべきは Sir Coutts Lindsay の創設にかかる Grosvenor Gallery のことや、並びにそれに関連して美術記事の多いことや、更に貴族で有名な巨大漢 Herbert Campbell が胸に大きな向日葵の花を飾った唯美主義者として、1882年4月8日の "Entr'Acte" 誌上に一頁大の大きな戯画としてかかげられているのを、そのまま切抜いて挿入してあることなどである。この戯画は唯美主義者 (Aesthetes) というものが、何時頃から、又どういふ範囲で世の注目を浴びることになったかを知る上の貴重な資料である。

- (2) 第二集 大型四ッ折版。収められた記事は長短120余篇、記事の範囲は、前半を主とし、後半は何かの機会でここに紛れ込んだと思われる形になっている。前半の記事の多くは、1880年代のものであり、後半のそれは、1890年代以後のものである。

前半中特に重要なのは、所謂唯美主義運動の端緒となったオペラ "Patience, or Burthorne's Bride" についての各紙の精細な劇評であり、且つそれらの劇評記事中に挿入された多くの戯画のかずかずは、単に文学史的にばかりでなく、文化史的にも風俗史的にも重要視さるべきは言をまたない。従ってここでは Punch や World や The Illustrated London News などが特に多く引合に出されている。

後半の記事には、第三集に入れられるべき筈のワイルドの新作 "A Woman of No Importance" の各紙の劇評や、1893年4月28日の "Westminster Budget" 所載の "The Death of Mr. J. A. Symonds" と題する追悼記事などの注目すべきものがある。注目といえば1913年11月20日の Chicago Record Herald 所載の "Oscar Wilde is Alive" と題するものなど短文ながら特に猟奇的な意味で注目に値するものであった。Milland 大型蔵書票。

- (3) 第三集 大型四ッ折版。1890年から1895年までのワイルド最盛時代の戯曲

"The Woman of No Importance", "An Ideal Husband", "The Importance of Being Earnest", "The Dutches of Padua", "Salome" などの各紙の批評を収録したものが大部分を占めている。舞台装置や俳優の演技をさながら彷彿つたらしめている20余の影印亦珍重に値する。撰収されたものも上記二集以外 The Graphic, Sketch, Black and White など舞台演技に関するものが多い。記事は130余篇、表紙裏の蔵書票は、表紙改装の折散逸。

- (4) 第四集は1894年から1895年にかけての演劇の記事で埋められている。作家はワイルドのほか、Ibsen, Pinero, Shaw, 俳優には Lawrence Irving, Robertson,

'Salah Bernhardt, Terry, Miss Marion, Guilbert Yvette などがあ

"Moral Responsibility in the Novel & the Drama" と題する35頁に及ぶ長論文が挿入してあるのも、この集の大きな特色である。この論文冒頭の断り書きによれば1894年11月7日 Edinburgh の The Session of the Philosophical Institution で読み上げられたものであるとのこと。筆者も刊行書店も不詳であるが、イギリスにお

ける当時の文壇劇壇の鳥瞰図ともいべきもので、私には一読極めて得るところ多かつたものであった。この集にも前集同様蔵書票は脱落している。

- (5) 第五集 大型四ッ折版。 Millard 大型蔵書票貼附。ワイルドは1895年4月3日、其当時の社交界の中心人物の一人であった Marquis of Queensberry を相手取って誹毀の訴へを起し、敗訴して却つて猥褻罪として起訴され、その結果は2年間の牢獄生活を送らざるを得ないということになった。この第五集はそれらのことについての当時の各新聞雑誌の切抜を集めたものであつて、ワイルド下獄事件の真相を明らかにする上には不可欠な資料的集大成である。拙著「英国近世唯美主義研究」の中のワイルド「下獄誌」の一篇は、主としてこの第五集に依つたものである。所収の新聞雑誌にも、前記のもの以外 Illustrated Police Budget というような異色のものまで含まれている。必読すべき長篇記事の中でも Times, Weekly Edition 所蔵の "Sensational End of the Wilde Libel" と題するものや、更に Old Bailey (中央刑事裁判所)におけるワイルドの生活の種々相の挿画入り解説などは、ワイルド最盛期の華々しい生活を知っている者にとって、恐らく涙なしには読めぬほど悲惨な記事といえる。水陸両棲の太古の化石である Iguanodon という怪獣の想像画——1895年5月18日の Illustrated London News に附録として挿入されているこの想像画——の上に、Queensberry が自筆で 'Original answers of Oscar Wilde on the war path of the madness of kismet young males' と書いて、折柄 Old Bailey に収監されていたワイルドに送つて嘲弄したといふこの新聞附録の原物そのものが挿入してあるのもこの集の大きな特色といへる。

- (6) 第六集 } 四ッ折型上下二帖の部厚いモロッコで背を包んだもの。
(7) 第七集

その上、手造りの紙の一面だけに切抜きを貼りつけ、他面は白のままにしてあるなど、ぜいたくな切抜帖である。De Profundis Press Notices という背文字が示しているように、1905年の De Profundis の刊行と共に、各誌各紙に現われた書評、短かきは3,4行、長きは数頁及至は十数頁にわたつた長文まで精細に選択し、丹念に取上げられた各誌各紙が、従来のもの以外に Christian World や Church Family News Paper のような基督教関係のものから、World of Dress のようなものにまで及んでいること、並びに Glasgow Herald や Essex Country Chronicle のような地方紙の多くに及んでいることなど、他の集に見られないこの集二巻の大きな特色である。特色といえば Arthur Symons, Max Beerbohm, Alfred Douglas, G. Lowes Dickinson, Oliver Hobbes, Cunningham Graham, George Underwood, George Slythe Street, Professor Hugh Walker など知人の人々の "De Profundis" についての長篇論文を夫々初出雑誌から選択して挿入してあるなどもこの集の持つ大きな特色といえる。又、上巻の巻頭に "De Profundis" の原稿の一頁をさながらに複写した一葉を添附し

であるのもよき企画であるといえる。

なお第七集最後のところにある Mirror 紙所載の "Is Oscar Wilde Alive?" の一文など "De Profundis" の影響のいかにひろく行き亘っていたかということと共に、所謂ワイルド神話の一挿話として注目に値するものであった。Millard の小型蔵書票貼附。

- (8) 第八集 小型四ッ折版、Millard 蔵書票。1900年以後1907年までの各誌各紙よりの抜粋切抜長短約300を収む。"De Profundis" 刊行以後、ワイルドについての興味の増大に伴ってか、フランスの L'Estafette の "Mort Oscar Wilde" や Politique Colouiale の "Obseques d'Oscar Wilde" などを始めワイルドについての回顧記事が目立つ。Sherard 著の "The Life of Oscar Wilde" の批評や、アメリカ版のワイルド全集とロンドンの Methuen 社のワイルド全集の比較、並びに前者に序を書いた Le Galliene と後者の編集者である Robert Ross との間に交わされた書簡など必読のものである。必読といえは1909年12月5日刊の "Is Oscar Wilde Alive?" の長篇記事もその重要な一つである。
- (9) 第九集 四ッ折型帖。1907年中に上演された劇評記事が大部を占めている。就中、1907年の1月 His Majesty 座で上演された "A Woman of No Importance" に対する細評 (劇評家 J. T. Grein 筆) 並に Tree の Lord Illingworth, Mrs. Allenby 其他主たる登場人物の俳優写真入りで大きく取り上げた The Sketch や、折柄パリにおける歌劇 "Salome" にいてのバリ特派員の長文の報告記事や、Illustrated London News 5月18日紙上で "Will it be Seen in London?" と煽情的な題目で Strauss の歌劇 "Salome" の独仏其他欧州各国の上演とその有名な歌手たちを大写真で紹介したものなど、特に注目すべきものであった。蔵書票は散逸、欠く。
- 10 第十集 四ッ折型帖。1907年から翌8年にかけての劇評、書評など約200を収めたものである。その中では Morning Leader の1907年9月20日所載 "Art and Socialism" の題下で、画家 Walter Crane の新著 "An Artist's Reminiscences" を取上げて、それを細評した一文や、1907年12月28日の Academy 所載 "Translation or Adaptation" と題する一文など、私に特に興味のあるものであった。この集にも Millard 蔵書票は散逸、欠く。
- (11) 第十一集 八ッ折型帖。1895年から1913年までの事件を含む。ワイルドの敗訴、下獄事件等の数々の記事は、第五集のそのの遺漏を補ったものと見るべく、1913年の所謂 Douglas-Ransome の事件についての諸文献、"An Apostle of the Grotesque" の題下で埋められた長文の Beardsley 会見記など一読すべきものが多い。Millard の蔵書票欠く。
- (12) 第十二集 小八ッ折型帖、Millard 蔵書票。"Solome in America" と題して、1907年におけるアメリカにおける "Salome" の劇評約20篇を集めたものである。巻末に附

れた "An Opinion of Salome" は短文ながらアメリカのサロメ観の一端をうかがうに
足るであろう。

- (13) 第十三集 小八ッ折型帖、Millard 蔵書票。1905年から1913年までの記事で "Art
and Morality" 以下の Mason 解説編集のワイルド物の各誌各紙の短評を集めたもの
である。
- (14) 第十四集 ワイルドの収監されていた Reading Gaol の監守 Martin が、飢えている在監
中の小児に食物を与えたのが監則違反として罷免されたという記事を Daily Chronicle
上で見たワイルドは、1897年5月28日の同紙に、"Some Cruelties of Prison
Life" と題する長文の一文を寄せて、監守 Martin を弁護すると共に監獄制度の不備を
官憲に訴え、官憲側もこれに答え、所謂 —"The Case of Warder Martin" — という
一種の社会問題がおこったが、ワイルドは更に翌1898年の3月24日の同じ紙上に
再びこの問題を取上げ、"Don't read this if you want to be happy to-day" と題す
る長論文を寄せている。ワイルドのこの2つの長文は、イギリスの監獄制度改革の端緒
となった重要な文献であるが、この第十四集はこの二文献と共に、その間の Martin の
Daily Chronicle 宛の弁解、並びにワイルドの獄中生活についての Mason の問いに
答えた Mason 宛自筆書簡を添えている。大型四ッ折型、Millard 蔵書。
- (15) 第十五集 オペラ Patience 関係の大型ポスター、"O! Beautiful Star", Serenade
(Words by Oscar Wilde, music composed by Lawrence Kellie, Oscar Wilde.
漫画及び歌詞、音譜入り)、外に歌詞、音譜の表紙 The Flippity Flop Young Man,
Utterly Utter など、並びにワイルド戯曲上演番附数種。これらは何れも Mason 蒐集
品であり、特にここに挙げた上演番附は数十点の中から見本として取上げたものである。
なお Stuart Mason 稿の "Oscar Wilde and the Aesthetic Movement" (1920
年刊) は、ここにかかげた "Patience" 関係のポスターを影印として取り入れて、唯美
派運動を説明したものであるので、あわせてここにかかげることにした。本稿第一集、
第二集参照。
- (16) 第十六集 Bibliography Label を各厚板紙の表紙に貼付したもの8種。型は大型4ッ折
のもの3種、其他小形のものである。年月順に従って下に列記して置く。
- a. Cartoons by Alfred Bryan (The Entr' Acte Annal, 1882)
 - b. Windermere's Fan & the Further Teaching of Oscar Wilde
(Ludgate Monthly, September 1893)
 - c. The Aesthetes by Thomas F. Plowman (Pall Mall Magazine, 1895)
 - d. In Praise of Oscar Wilde (Review of Reviews, edited by W. T. Stead,
June 15, 1895)
 - e. Salome — the Play & Opera (The Craftsman, 1907)
 - f. Oscar Wilde in Paris by Arthur Ransome (T. P. 's Magazine, June 1911)

- g. Unpublished Parts of "De Profundis" & Some Victorian Letters
(Outlook, 1913)
- h. Oscar Wilde; Some Hitherto Unpublished Letters of the Last Phase by
Louis Wilkinson (The New Statesman, January 1914)
- i. Portraits of the Nineties : Oscar Wilde (The Outlook, November 27, 1920)

第十七集 なお次の第十七集に挙げる各誌の中のワイルドに関する記述は、元来が前掲 Bibliography Label を附して整理しておかすべき筈のものが未整理のままになっていたと思われるものである。以下、例によって年代順に列記して読者の参考に資する。

- a. Concerning Some of the Enfants Trouves of Literature
(Lady Currie, July 1904. The Nineteenth Century & After)
- b. Oscar Wilde : A Memoir, J. M. Stuart Young (1905, English Illustrated Magazine)
- c. Oscar Wilde as Editor, Arthur Fish (July 4, 1914, Harper's Weekly)
- d. The Sadism in Oscar Wilde's Salome, Isador H. Cariat (July 1914, Psychoanalytic Review)
- e. Coming Back of Oscar Wilde, R. L. Galliène (March 1919, Munsey Magazine)
- f. Oscar Wilde, Poet, Essayist, Dramatist, Lewis Melville
(The New World, November 1919)
- g. A Jester with Genius, Arthur Symons (The Bookman, April 1920)
- h. The Return of Oscar Wilde, Hester Travers Smith (The Occult Review, August 1923)
- i. The Tragic Story of Oscar Wilde (Life and Letters, Oscar Wilde Number, July 1923)

第二部 ワイルド研究に関する稀観文献

- 18 Pro and Con. 1873 (London, E. & F. N. Spon)
Walter Hamilton 編集の文壇雑誌であり、稀観中の稀観である。
- 19 Patience. 1881.
1881年ロンドンの Savoy Theatre 及びニューヨークの Standard Theatre で上演された "Patience, or Bunthorne's Bride" のプログラムであり、表紙には 'written by W. S. Gilbert, composed by Arthur Sullivan' とあり、'new and original Aesthetic Opera' と銘打っている。ニューヨークの Art International Press 社刊行。
- 20 Poems by Speranza. 1882 (Glasgow, Cameron & Ferguson)

Speranza は所謂 Lady Wilde でワイルドの母。アイルランドの有名な愛国詩人である。
この詩集は第2版で、Hamilton の旧蔵、自署、蔵書票。

1920) ② Aesthetic Movement in England by Walter Hamilton. 1882 (London, Reeves and Turner)
Aesthetic Movement を論じた最初の著者として高く評価されている。

② Comic Cocker. 1888 (London, Ward and Lock)
Walter Hamilton の自署並に蔵書票貼附。

② Parodies. 1888 (London, Reeves and Turner)
英米詩人の parody を選択編集した雑誌。編集者は Walter Hamilton 。この号は Morris, Wilde を主としたもの。第6号である。

② The Picture of Dorian Gray. 1890.
1890年7月の雑誌 Lippincott's Magazine 初出。

② Lachryme Musarum & Other Poems by William Watson. 1892 (London, Macmillan & Co.)

② Players of To-day by Rudolf Dirks. 1892 (London, Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent, & Co.)
中に Mr. Oscar Wilde の肖像入りの一章がある。

② The Theatre (Monthly Review of the Drama, Music & the Fine Arts), 1892.
(London, Eglinton & Co.)
1892年分一年分揃。

② The Theatre. June 1893.

② Aristophanes at Oxford. 1894 (London, Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent & Co.)

③ The Green Carnation by Robert Hitches. 1894 (London, William Heinemann)
Heinemann 刊行の The Pioneer Series の一であり、ワイルドとダグラスとの関係を描いた所謂モデル小説であり、作中の Esme Amaranth がワイルド、Lord Reginald Hastings はダグラスであるという。口絵は Beardsley の注文とすることで、歌麿の「朝鮮女風俗」の一枚をそのまま色刷にしたものである。

③ Phrases and Philosophies for the Use of the Young. 1894 (Printed for private circulation)

この冊子は 'printed for private circulation' としてただ75部を印刷したもの。そして本書はその最終の75番となっている。その意味では、これまた珍書の一つといえる。頁数は日本の四六版型で11頁のものである。

③ Oscar Wilde by Ernest Newman. 1895.

著者が雑誌 Free Review に連載したものを 16mo 袖珍本に翻刻したもので、僅かに25部だけのものであり、定価も発行所も何もない。その意味では珍中の珍といえる。

- ③ The Life of Oscar Wilde as Prosecutor and Prisoner. 1895.
著者不明。ワイルドの下獄事件当時ロンドンの街上で売られていた小冊子。Millard蔵書票。
- ④ Apologia pro Oscar Wilde by D'Al Young. 1895
(London, William Reaves)
- ⑤ Footlights. Judy's Annual for 1895.
これと⑧ Theatreの二つの演劇雑誌のうち、Theatreには "To Oscar Wilde, Esq." Footlights
には "On Oscarism" と題して短文ながらワイルドのパロディ、Aphorismについての注目
すべき批評が載っている。
- ⑥ Children in Prison & Other Cruelties of Prison Life by Oscar Wilde. 1898
(London, Murdock & Co.)
前述 Daily Chronicle 紙上に寄せたワイルドの長文を収めたもの。(「切抜帖第十四集
参照)表紙上段に Price one penny と明記してある。
- ⑦ Sebastian Melmoth by Oscar Wilde. 1904 (London, Arthur L. Humphreys)
- ⑧ The Book-Lover's Magazine. 1905 (Edinburgh: Otto Schulze & Co.)
中に W. R. 氏による長文の Notes for A Bibliography of Oscar Wilde がある。当時
における最も正確且つ精細なものか。
- ⑨ Recollections of Oscar Wilde by Percival Pollard. 1906 (Boston & London,
John W. Luce & Co.) Millard 蔵書票あり。
Andre Gide, Ernest La Jeunesse, Franz Blei 三人の回想記を集めたものである。
- ⑩ Impressions of America by Oscar Wilde. 1906. (Edited, with an Introduction
by Stuart Mason) Keyston Press, Sunderland.
- ⑪ The Priest and the Acolyte, with an Introductory Protest by Stuart Mason. 1907
(London, Lotus Press)
"The Priest and the Acolyte" はもと1894年12月の The Chameleon に掲載
されたものであり、作者は an insufficiently birched schoolboy という Oxford の一学生
であるが、凶らずもこの作が例の訴訟事件の折、ワイルドのために極めて不利に取扱われた
のを遺憾として Stuart Mason が長序を附して改めて改刻したのである。
- ⑫ The First Stone by T. W. H. Crosland. (On Reading the Unpublished Parts
of "De Profundis") 1912. (London, published by the Author)
- ⑬ Oscar Wilde by R. Thurston Hopkins. 1916. (London, Simpkin, Marshall,
Hamilton, Kent & Co.)
Mason への献呈本。Hopkins 自筆の断り書に依れば、本書は250部の出版であったとい
う。
- ⑭ The Picture of Dorian Gray (From the Romance of Oscar Wilde). A play
dramatised by G. Constant Lounsbery. 1913 (London, Simpkin, Marshall,

Hamilton, Kent & Co. L. T. D.)

1913年9月28日にロンドンの Vaudeville Theatre で上演される台本として、序曲外三幕に劇化されたもの。

- (45) Letters to the Sphinx from Oscar Wilde and Reminiscences of the Author by Ada Levenson. 1930 (London, Duckworth)
この書は275部印刷、内250部買品、本書はその63番であるという。著者署名本。
- (46) Oscar Wilde — Recollections by Jean Paul Raymond & Charles Ricketts. 1932 (The Nonesuch Press)

第三部 ワイルドの「髪の毛」「書簡」その他

- (47) ワイルドの「髪の毛」
ワイルドの第二子 Vyvyan Holland 氏からの厚意の贈物である。"Oscar Wilde's hair cut off by Mr. Robert Ross After his death. 3p. m., 30th, 1900. Vyvyan Holland."
髪の毛を入れた封筒の表紙に Holland 自筆自署の上のような文句の極め書きがある。

- (48) ワイルドの自筆書簡。画家 Mortimer Mempis 宛。中形判、二折の書簡箋に4頁にわたって記されたもので、ここでは始めの頁と終りの頁とを示している。
書簡の全文は次の通りである。

My Dear Mempis,

I send you a copy of my little book, which I hope you will accept as a small proof of the admiration I have for you as an artist, and the pleasure I have in you as a friend.

For delicacy, fancy, and refinement, we have no painter who is your equal, and I hope that some day I may have something from your hand to adorn and make delightful some book of mine.

なお、これについての解説は昭和49年4月号の「英語青年」並に昭和49年11月刊の「実践英文学」第6号所載の拙稿の一読を乞いたい。

- (49) オスカーワイルドの墓
Pere-la-Chaise 境内のワイルドの墓の写真。署名は墓の作者彫刻家 Epstein の自署。Stuart Mason 旧蔵。拙著「滞欧印象記」所収「オスカア・ワイルドの墓」参照。
- (50) Mr. Oscar Wilde
1884年5月24日の雑誌 Vanity Fair 所載 "Men of the Day" の題下で、Jehu Junior の解説付きで掲げられた一頁大の彩色石板画の漫画である。画家は Ape 。
- (51) Wilde Cult 二種
(a) Aesthetic Maiden

(b) Patience Lancers

2つとも "Patience" に因んだ諷刺漫画。なおこのことは前述「新聞雑誌切抜」第一集所収、雑誌 Entr' Acte (1882年4月号) 所蔵一頁大の漫画 Mr. Herbert Campbell (The Jumbo Aesthete) と合せ一見されることを希望する。"Aesthetes" 又は、"Aesthetic" という言葉がいかなる範囲までひろく行き亘っていたかは想像に余りあるのである。

62 英国1880年代初期代表人物漫画

当時におけるワイルドの社会的位置を明らかにするためには此上のない好資料であり、拙著「英国近世唯美主義研究」の巻頭口絵に掲げておいたのであるが、戦災のために原画(石版画)焼失。やむを得ず、せめてもと拙著の口絵をそのままに展示。画面右方人気塔の頂上に向き葵を手に悠然と立っているワイルドを注意して一見されることを希望する。

63 Max Beerbohm 筆、D. G. Rossetti の後庭。1904年刊の著 "Poet's Corner" の中の一図である。Rossetti の後庭に集まった人々は、いづれも Wilde の世に出る前の人々であるが、この中の後のワイルドの論敵の一人であった Whistler の人を人とも思わぬ豪然たる態度に特に留意されることを希望する。

64 Mr. Algernon Charles Swinburne.

1874年11月21日の雑誌 Vanity Fair 所載 "Men of the Day" の題下で Jehu Junior の解説付きで掲げられた一頁大の彩色石板画の漫画である。画家は Ape.

65 Mr. Max Beerbohm.

1897年12月9日の雑誌 Vanity Fair 所載 "Men of the Day" の題下で、Jehu Junior の解説付きで掲げられた一頁大の彩色石板画の漫画である。画家は Sic.

66 Beerbohm の筆跡

Beerbohm の著 "Dragon of Hay Hill" の口絵の上に私の乞いに応じて書いた言葉である。拙著「滞欧印象記」所蔵の「無敵のマックス」参照。

67 Arthur Symons の自署入り写真。

68 Arthur Symons の自署詩稿。拙著「滞欧印象記」所収「アーサー・シモンズと語る」参照。

69 R. L. Galliene の本間宛書簡、詩稿、自署入り小照。

70 Gordon Craig の本間宛書簡、自署入り小照、並に識語。

71 Holbrook Jackson 氏の自署入り小照。

72 Holbrook Jackson 著 "The Eighteen Nineties 見開の上の筆跡 (本間宛の言葉)

73 T. W. H. Crosland 稿 "The Story of Regent Street" 刊行年、発行未詳。

この書所収 Crosland 稿の Cafe Royalists 及び挿入の挿画、Crosland の漫画、及び世紀末時代の Cafe Royal の石板画三葉は、当時を偲ぶ恰好の資料である。拙著「滞欧

印象記」所収「カフェー・ロイヤル」参照。

60) Vyvyan Holland 氏と私

1928年秋、ロンドンの日本料亭常盤にて影撮。向って右方 Vyvyan 氏。拙著「滞欧印象記」所収「オスカア・ワイルドの遺子と語る」参照。

65) The Suppressed Portion of "De Profundis" のタイプ。

私が滞英中 Vyvyan Holland 蔵のものを借覧。タイプ校訂したもの。「滞欧印象記」所収「オスカア・ワイルドの遺子と語る」参照。